

追悼エッセイ

日本科学史学会京都支部における伊藤先生との思い出

小長谷 大介*

Memories with Professor Ito at the Kyoto Chapter of the History of Science Society of Japan

Daisuke KONAGAYA

2021年7月5日に亡くなられた伊藤和行先生に謹んで哀悼の意を表します。伊藤先生と私の接点は学問的交流よりも日本科学史学会京都支部運営における交流が主だったので、それらを中心に追悼エッセイを記します。

伊藤先生は1995年に京都大学文学部に赴任された数年後に、日本科学史学会京都支部の世話人となり、15年ほどを務めた後の2013年2月に「さすがに長くなったので、今年度で降りたい」という旨のメールを、瀬戸口明久さんと小長谷に送ってこられました。瀬戸口さんはちょうど2013年4月に京都大学人文科学研究所に着任されるタイミングだったので、単に伊藤先生から瀬戸口さんへという世話人交代でよかったと思いますが（伊藤先生と瀬戸口さんの間で何か話し合いがあったのかもしれませんが）、最終的に瀬戸口さんと小長谷の二人体制で京都支部世話人を2013年度から受けるという流れとなりました。その後、伊藤先生は、あとはよろしく、という感じで済ませるのではなく、交代後もしばらくはいろいろとサポートをしてくれ、西日本地域の各支部（京都支部、阪神支部、中国支部、四国支部）の世話人で協力し運営している科学史西日本研究大会の第20回（2016年12月4日）は、伊藤先生のご厚意で京都大学文学部での開催となりました。この大会も関西の研究者だけでなく、中国・関東からの参加者もあり、盛況だったと記憶しています。伊藤先生自身は研究イベントの開催などに積極的だったという印象はないのですが（私の誤解でしたら申し訳ありません）、京都地域の例会や研究大会をしっかりとサポートしてくれ、見守ってくれていました。時には愚痴などを親身に聞いてくれることもあり、そうしたことは私にとってたいへん有難かったです。いまさらながら、伊藤先生の親切な対応には深くお礼申し上げます。

* 龍谷大学

伊藤先生との思い出のうち、とくに思い出深いのは DSB (*Dictionary of Scientific Biography*, Scribner, 1970- ; 8 巻セットは 1981 年) に関するものです¹。世話人交代後の時期だったと思いますが、伊藤先生が所蔵本の一部を整理したいということで、量子論関連の本と併せて、8 巻セットの DSB を譲ってもらうことになりました。伊藤先生自身は電子版を使えるということだったと思いますが、大部な 8 巻本を譲ってくれるというのは私にとって恐縮なことでした。ただ、問題は全 8 巻の DSB はとてつもなく重く (20kg ほど、ないしはそれ以上か)、とても取りにいけるものではなかったので、どうすればよいかと率直に聞き返したと思います。そうしたところ、気さくな伊藤先生らしく、家用車で私の勤務校まで届けてくれるということでした。ということで勤務校の龍谷大学深草キャンパス (京都市伏見区) まで届けて下さり、その時はたしか、私の研究室で数時間歓談したと記憶しています。どういった話をしたかは残念ながら思い出すことはできないのですが、二人きりで長い時間話をしたのはこれが唯一だったかもしれません。また、DSB は私が大阪の金子務先生のもとで科学史の勉強を始めた最初の時期に苦労しながら読んだもので、私にとって DSB は科学史研究の原点として思い出されるものです。いまでは DSB を読み返す機会はほとんどなくなりつつありますが、伊藤先生から譲ってもらった DSB を研究室の机のすぐ横に置き続けています。

当初、DSB を机の横に置いた理由は、思い入れのある本をそばに置くためでしたが、いまは、本意ではないながら、生前の伊藤先生からいただいたものという意味もつこととなりました。その分厚い布張りの 8 巻本は存在感も大きく、他の本とは異なる雰囲気を出しています。伊藤先生がこのように早くに亡くなってしまったのはまったく予想できなかったことですが、原典を緻密に読み込み、そこから得られる知見を着実に分析し、その成果を発表し続けてこられた伊藤先生の研究スタイルに対する感銘は、この DSB を見るたびに思い起こされます。感銘を受けた一人として、今後も、その DSB を横に置き、そうした研究スタイルの重要性をあらためてかみしめて、ペースは遅いながらも、私自身も研究を続けていこうと考えています。

伊藤先生、ありがとうございました。安らかに。

¹ 新 DSB もあるが、ここでは DSB だけを指す。*New Dictionary of Scientific Biography*, Charles Scribner's Sons, 2008.



図1 伊藤先生から譲り受けたDSB（筆者撮影）